

書くことで自分の考えを整理し、共に関わり合いながら求めて学ぶ子を育てる学習はどうあったらよいか
～言語活動の充実をめざした新聞の4コママンガ教材化の試み～

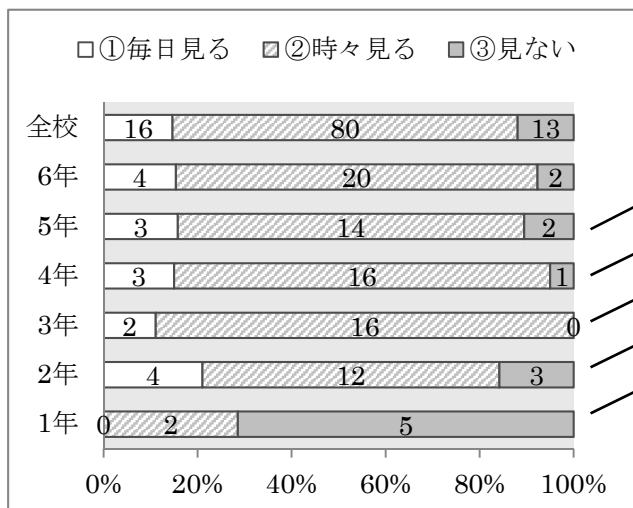
指定校 2 年次 駒ヶ根市立中沢小学校 清水貴美子 梶谷祐介

一 本校の新聞活用（N I E）の現状

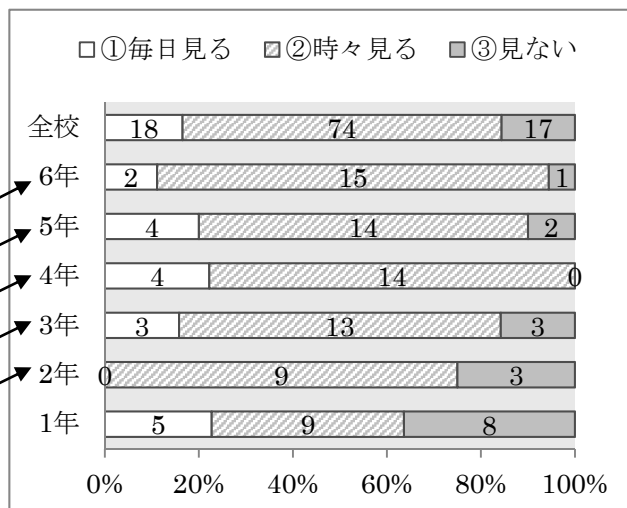
1 新聞アンケートの結果から

本校ではN I Eの研究指定校となった昨年度から、新聞に関するアンケートをとっている。昨年度と本年度の比較をしてみると、以下のようなことが分かった。

（１）あなたは家で新聞を読みますか？



<昨年度（2012）>



<今年度（2013）>

昨年度、今年度と継続的にN I Eの授業を取り入れている2・4年生はよく新聞を読むようになっていると言える。また今年度から取り組んでいる1年生も1年生にしては新聞に興味を持ち、よく手に取り見ていることが分かる。

高学年においては、あまり大きな変化は見られないが、以下のアンケートから分かる、読んでいる記事の内容については大きな変化が出てきている。

（２）どんな記事を読みますか？（複数回答可）

<昨年度（2012）>

	①4コマ漫画	②テレビ観	③一通り	④その他
1年	1人	1人	1人	3人
2年	8人	10人	0人	5人
3年	10人	8人	5人	3人
4年	10人	9人	5人	0人
5年	3人	9人	4人	4人
6年	15人	16人	6人	7人
全校	47人	53人	21人	22人

<今年度（2013）>

	①4コマ漫画	②テレビ観	③一通り	④その他
1年	6人	11人	5人	7人
2年	7人	0人	1人	12人
3年	5人	7人	5人	2人
4年	3人	1人	14人	0人
5年	5人	9人	7人	1人
6年	0人	4人	8人	6人
全校	26人	32人	40人	28人

(その他の内訳) ・自分や知っている人が載っている記事 6人 ・子ども新聞..... 1人 ・スポーツ..... 8人 ・興味のある記事..... 2人 ・社会・政治..... 3人 ・事故・火事・地震..... 4人	(その他の内訳) ・子ども新聞..... 8人 ・スポーツ面 野球 サッカー..... 7人 ・興味がある、面白そうな写真や記事... 4人 ・動物の記事..... 3人 ・地域の記事..... 2人 ・自分の出た記事..... 1人 ・大ニュース..... 1人 ・広告 1人 ・オジヤン君 1人 ・写真 1人 ・うちの宝物を探す..... 1人
---	---

昨年度と比べると、4コマ漫画やテレビ欄だけでなく、新聞に一通り目を通す児童がおよそ倍になった。新聞に関心を持つ児童が増えていると言える。

また、4コマ漫画の教材化に取り組んでいた1・2年生では4コマ漫画に興味を持って目を通していている児童も多い。

2年生においては新聞スクラップの発表を朝の時間に位置づけており、学級全員の子がアンケート④その他の項目を選択しており、記事に興味をもって新聞を読んでいることが分かる。2年生なので新聞記事を読むことはできないが、写真から情報を得たり、保護者と一緒に記事を読んだりするなどファミリーフォーカスに取り組む傾向も出つつある。

④その他の項目の内訳を見ると、新聞スクラップに取り組んできた高学年を中心に今年度の方が興味のある記事・おもしろそうな写真だけでなく、スポーツ面、興味がある動物の記事、地域の記事など、記述の仕方が具体的になってきている。新聞の記事に興味を持って読み、自分の求める情報を新聞から探そうとしている児童が増えてきていると言える。

2 標準学力調査の結果から

次に毎年、市で行っている標準学力調査の結果に注目した。本校児童の学力にはどのような傾向があるのだろうか。今年はN I Eの取り組みと関連させながら、特に国語の結果に注目し、傾向をつかむことにした。

(1) 国語の結果 ※太字は全国平均を上回っているもの。1・6年は実施していない

学年	教科の正答率			領域別正答率				観点別正答率				
		基礎	活用	話すこと 聞くこと	書く こと	読む こと	伝統的な言語文化 と国語の特質に関 する事項	国語への 関心・意欲・態度	話す・聞く 能力	書く 能力	読む 能力	言語についての 知識・理解・技能
2年	81.5	85.5	62.5	86.1	72.2	81.9	82.6	75.0	86.1	69.8	76.0	88.0
全国	81.1	85.6	60.2	88.4	74.8	75.6	83.9	77.4	88.4	72.2	70.5	90.3
3年	83.8	85.0	79.1	77.8	92.4	80.5	85.7	84.1	77.8	86.1	79.4	85.7
全国	77.9	81.2	64.7	74.0	71.8	74.6	83.1	73.0	74.0	67.7	72.5	83.1
4年	69.7	74.4	48.3	75.9	72.9	66.3	69.4	73.0	75.9	68.1	66.3	69.1
全国	69.0	73.7	47.4	75.4	77.0	61.8	69.5	75.2	75.4	70.4	61.8	69.0
5年	65.3	69.3	46.5	56.9	51.3	76.3	65.6	56.1	56.9	49.3	75.6	64.6
全国	72.7	75.5	59.5	63.6	70.0	78.7	72.7	67.7	63.6	67.2	77.7	72.2

（２）分析・考察

○全体的に算数よりよくできている。特に活用は３学年にわたって全国を上回る結果となっている。

○領域別にみても「読むこと」、観点別にみても「読む能力」と「読むこと」についてはとても良くてできていることがわかる。これは日課に読書を位置づけ、活字に触れる機会が多いからと考えられる。

●領域別にみると「書くこと」および「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が全国と比べて劣っていることが分かる。

●観点別にみると「書く力」に加え、「国語への関心・意欲・態度」も低くなっている。

標準学力調査の結果から、本校の子どもたちは好きな本を読み、読書の世界浸るのが好きであり、そんな子どもたちは増えていることがわかる。またNIEの取り組みや読書により、本や活字、言葉に触れる機会は増え、言語についての知識・理解・技能は高まってきているが、国語への関心・意欲・態度や書くこと意識や能力が高まっていないこともわかった。自分の気持ちや考えをどう表現していけばよいか学ぶ機会を増やしたり、書くことへの楽しさを味わわせたりする活動を授業に取り入れていかななくてはならない。

二 実践のねらい（育てたい力）

本校の教育目標「考える やりぬく 思いやる」から、全校研究テーマを『一人ひとりが自分の考えを持ち、友と関わり合いながら学びを深めていく学習はどうあったらよいか』と据え、様々な事象や問題に対して、自ら課題を持ち、友だちと関わり合いながら学習を深め、求めて学ぶ子どもたちを目指している。

今年度、NIE研究グループでは、このテーマを受け、子どもたちの実態に合った記事の提示の仕方や書くことで自分の考え方を整理し、自信を持って発表していくための個人追究のあり方を研究してきた。また、低学年の授業でも扱いやすい新聞の教材化を研究してきた。

本校は全学級が単級の小規模校であり、子どもたちは保育園の頃から一緒に過ごす仲間の中で、お互い言いたいことを言える素直な子どもたちが多い。また、読書が好きで本の世界から多くのことを学びとり、標準学力調査からも「読むこと」については全国を上回る力を持っている。その反面、自分の考えや疑問を書き表したり、説明をつけて発表したりしながら、互いに学習を深めていくことには抵抗が見られる。その理由として、日常生活の中で自分の考えを書いてはっきりさせたり、説明をつけて話したりする経験が少ないのではないかと考えられる。授業の様子も消極的であり、目的意識を持って主体的に取り組めていなかったと考えられる。

そこで、子どもたちの得意分野でもある「読むこと」及び「読む能力」を活用しながら、自分の考えを書いてはっきりさせたり、説明をつけて話したりする経験を多く積ませたいと考えた。自分の考えを持つ時、考えのよりどころとなる言葉や文から問題意識や理由づけができるようになれば、自分の考えに自信を持って表現できるだろう。また、表現していくことに楽しさを感じることができるようになれば、意欲的に発言したり、主体的に学習に取り組んだりする姿につながっていくだろう。さらには友達のことを聞き、考えを広めたり深めたりする楽しさを味わうことができるだろう。この延長上に「求めて学ぶ」子どもたちの姿があるだろうと考え、今年度の研究テーマを「書くことで自分の考えを整理し、共に関わり合いながら求めて学ぶ子を育てる学習はどうあったらよいか」とした。

三 研究の内容

1 本年度の実践事例

(1) 子どもたちの実態に合った記事の提示をし、記事と実体験を結びつける工夫をした4年生の事例

4年生は長野市へ社会見学に出掛けた際、県庁子ども記者体験で「鳥獣被害」について学び、駆除された鹿のほとんどを穴に埋めて処分している事実を知る。そこで、大鹿村が駆除したシカの肉を使ってカレーを作り、カレーフェスティバルで3位になった記事を提示し、実際にそのシカ肉カレーを食べる授業を考えた。この記事は「信毎学習シート」にもなっているが、学習シートはそのまま使わず、記事を使って考えを深めたい観点に絞って作った学習シートを使用した。

社会科では見方、考え方をいかに深めていくかが大切であり、それには新聞が使える。小学校ではなるべく具体へと結びつけていきたいと考える。今回は味覚に訴える教材であり、子どもたちの反応も良かった。新聞を読んだだけではわからないことが、実体験を通することで身近なものとなる。言葉の意味を体得し、一歩前へ進む授業となった。例えば「450個も売れる」→「鹿の臭みが無いから」という記事の中の言葉から、「どのくらい臭みが無いのだろう」という疑問を持ち、実際に食べてみた子どもたちは「本当に臭くない。美味しいな。」とわかる。記事を通して広がる世界、見方や考え方、さらに児童にとって裏付けとなる体験、具体がそこにはあった。

一方で答えのある学習シートを使ったために教師が正解を引き出そうと出す場面も見られた。児童への発問が一問一答のような形となり、子どもたち同士の学び合い、伝えよう、受け取ろう、学び合おうとする双方向の授業になりにくいという課題も出てきた。新聞を使って広げる、深める世界、どんな力をつけたいかを明確にして授業を考える必要がある。子どもたち自身が自分たちで進めていく授業、自分たちの言葉で作る授業とはどうあったらよいか、今後の研究の方向を考え直すきっかけとなった。

(2) 友達の考えを聞き、考えを広めたり深めたりする共同追究ができるよう板書を工夫した1年生の事例

1年生の児童は発言することに意欲的である。「言いたい」という気持ちが強いがために、発言することに満足してしまう。言いっ放しになってしまい、そう考える理由を明確にした発言をすることが難しい。

そこで、国語の「おはなしきいて」の単元と関連させながら、2年生が実践している4コマ漫画を利用した学習シートを使い、自分の考えと理由をはっきりさせ、友達の考えにつなげて話す授業を行うことにした。ここでは自分の考えと理由をはっきりさせ、友達の考えを聞きながら、考えを広めたり深めたりする共同追究ができるよう、子どもたちが見てわかる板書の工夫を試みた。

子どもたちの考えはA「こどもをどなってよい」とB「こどもをどならないほうがよい」の2つに分かれたが、子どもたちなりに明確な理由を持ち、自分の考えを発言することができた。友達の発言もよく聞き、発言する際も、友達の考えとつなげて発言しようとする姿が見られた。授業後の感想には、「みんなの意見を聞いて、Bもいいと思いました。いつもどなってばかりではなく、たまにおこらないのもいいと思います。」と自分の考えが揺れる児童もいた。

一方で「どなる」と「おこる」ということを混同してしまう児童も見られ、「言葉の意味」を正しく理解しながら、考えを深めていく教材化への課題も見えてきた。

（３）見とどけのあり方を大切に考え、学習意欲を高めた６年家庭科の実践事例

６年家庭科では５月、『見つめよう 食生活』の学習で、自分たちの食事について振り返り、考えたところ、「おかずに野菜があまりはいっていない。」「朝ご飯も夕ご飯も、特に朝は野菜をとっていない。」という事に気付いた子どもたちが、地域に住む一流シェフの宮下学さんの『中沢食堂』の新聞記事を目にして、地域にこんなすごい人がいるという事をあらためて知り、「どうして中沢食堂をやろうと思ったのか聞いてみたい。」「自分たちにもできる、簡単な野菜料理を教えてもらいたい。」という声があがり、宮下さんに来ていただくことができた。

宮下さんから『中沢全体を食堂にしたい。』という地域を大切に、願いを持って取り組まれていうお話をお聞きしたり、実際に料理に使う包丁を何種類も見せていただいたりしたことで、自分たちも地域の食材をつかって野菜料理を作りたい、という気持ちを持って行くようになった。そして、宮下さんに来ていただき、『ラタトゥイユ』を教えていただき料理した。料理をしていく中で、野菜を炒めるコツをつかんでいった子どもたちは、プロの宮下さんが「おいしい」と褒めて下さったことでさらに意欲が高まっていく。宮下さんの味とはやっぱり違うけれど、自分たちにも自分たちの力で野菜をつかった料理が作れるのではないかな…という見通しを持ち、材料選びからレシピ作りまで、２～３回とグループごとに実習を重ねていくことができた。

授業後の感想で、Ｙ児は「私は健康的な食材を使った食べ物やいろんな緑の野菜を使って料理を作りたい。中沢がこんなにいいところだとわかりました。」と書いており、Ｓ児も「料理のことがよくわかったし、調理実習が楽しみになってきた。身近だからわからないけど、宮下さんのお話を来て中沢っていいところだなと思った」と書いていた。学習の中で、教師以外で出会う地域の方やプロの人から学ぶことは大きく、言われた言葉や褒めていただいた経験が心に残り、子どもたちの意欲へとつながっていく。また、自分たちが育つ土地の良さを再認識する機会となる。さらに、新聞記事から生まれた出会いは、一緒に料理を作るという実体験とプロに認めてもらえたという子どもたちにとって特別な「見とどけ」は、子どもたちの行動として表れてきた。夏には駒ヶ根市のお料理コンクールに６年生が応募し、２名が入選することができたのも、宮下さんとの出会いがあったからだと思う。

３ 本年度のN I E 研究の仮説

言語活動を通した本校の子どもたちの実態は「読みとる」というような「受信」する力は備わっているものの、「書く」というような「発信」する力は相対的に低いと言わざるを得ない。

実際、現場では子どもたちの「伝え合う力」が低下しているということがよく話題になり、校内研究のテーマにあげられる学校をよく目にする。しかし、子どもたちが無口になったのかと言うとそうでもなく、友達同士楽しく会話をしているのをよく見かける。つまり、子どもたちは「伝えたい」という意思は持っているものの、「適切に表現できていない」「間違った表現をしたくないから伝えない」ということが言えるのではないだろうか。自分の思いや考えを一方向的に表現するだけでなく、双方向性を持って互いの思いや考えを共有したり、新たな思いや考えを生み出したりできるように、他社の思いや考えを理解する共生の力を培わせて、「伝え合う力」の育成につなげる必要がある。

<このような本校の児童の実態に対して> ○良さ ●課題

- 「読むこと」および「読む能力」が高い。
- 国語においては活用力が高く全国平均を上回っている。
- 新聞の4コマ漫画やテレビ欄だけでなく、中身を一通り読み込む児童が増えている。
- 学年が上がるにつれて「国語への関心・意欲・態度」が低くなる。
- 「書くこと」および「書く能力」が低い。
- 授業を受ける態度が消極的である。

<このような指導を通して>		<このような願う子どもの学びの姿に>	
手 だ て	① 子どもの実態に合った記事提示 ・学習場面の単純・明解化 ・実態に合った課題を持たせる ・興味・関心を促す教材	課題把握	新聞記事を読み、課題をつかむ ・興味・関心を持ち、問題意識を高める ・記事の内容や言葉を理解できる ・既習経験と比較しながら読むことができる
	② 個人追究場面の工夫 ・机間指導による追究の支援 ・児童の考えに線を引く ・考えのまとめさせ方の工夫 ・グループ・ペア学習の導入	個人追究	書くことで自分の考えを整理する ・言葉を書きくわえたり、つないだりしながら自分の考えを整理できる。 ・自分の考えに自信を持って表現できる ・既習経験に基づいて追究できる
	③ 共同追究場面の工夫 ・考えの発表の仕方の工夫。言いっぱなしにしない（聞くことで関わる授業づくり） ・自由に発言できる雰囲気作り ・友の考えとの違いや良さに気付せる ・計画的な指名 ・子どもたちの考えを関係付けながらまとめる。（板書の工夫）	共同追究	友だちの考えを聞き、考えを深める ・自分の考えを自信を持って発表できる ・友の考えの良さや自分との違いがわかる ・自分の考えと友達の考えをつなげて話すことができる ・先生や友だちとの関わりから求めて学ぶことができる
	④ 見とどけるの時間の確保 ・学習内容のまとめの時間の確保 ・教師の言葉がけによる見とどけ ・プロや地域の方の言葉がけ	学びの実感	学習したことを使って ・友達の考えを聞き、最初の自分の考えと比べて変わったことや感じたことを自分の言葉でまとめることができる

N I Eにおいて、子どもたちの実態に合った新聞の記事を選ぶのは非常に難しいといわれる。漢字を読むことが難しい低学年においては写真の他に扱える記事は少ない。そこで新聞の4コマ漫画に注目した。4コマ漫画は単純なように見えて、実に奥が深い。たった4コマの中に起承転結があり、季節感を感じる身近な話題やタイムリーな話題が登場すること多い。白黒の世界、場合によっては言葉や文も無いものもあるが、登場人物の表情や動き、周りの様子から情報を読み取ることができる。漫画であるが故に、想像をかき立てられ、低学年から高学年、そして大人までが楽しむことができるのである。文字が読めない低学年の児童であっても読み取ることができ、情報をつかむことができるおもしろい教材となるはずである。

2 新聞の4コマ漫画を活用した実践授業

(1) 単元名 「つたえ合い名人になろう」(国語)

(授業学年 2年生 男子2名 女子10名 計12名)

(2) 単元設定の理由

2年生の子どもたちは人数が12人と少ない上に保育園の時から一緒に過ごしている仲間なので、ふだんの生活の中では緊張感もなく、お互いに言いたいことを言い合える雰囲気がある。

しかし授業や集会などになると、自分の考えを進んで発表する子が少ない。また発言する時にも言葉が足らなかったり、言いたいことを十分伝えられなかったりする様子が見られる。(語彙力の不足・順序立てた話し方の不十分さ)同様に、自分の考えを自由に書く場面においても、「何を書いていいのかわからない」と悩む子が少なくない。学習の中で、自分の考えを書くことではっきりさせる経験が少ないため、何をどうやって書いたらいいのかわからなかったり、自分の考えに自信が持てなかったりすることが原因と考えられる。

そこで、本単元では、子どもたちが比較的興味を示しやすい新聞の4コマ漫画を取り入れ、共通の話題について、お互いの考えを伝え合う学習を行ってみたいと考えた。4コマ漫画は、低学年の児童でも文字だけの新聞記事より内容を理解しやすいという利点がある。また、設問の仕方によって、自分の考えをAかBか二択で選んだり、自由に想像して答えたりすることが可能である。まずは、4コマ漫画を読んで、どの子も自分の考えを持つことを目指したい。そして、自分の考えを学習シートに書く活動を取り入れることで、自分の考えをより明確にさせたい。また、自分の考えを発表する時にポイントとなる点を「つたえ合い名人」として押さえることによって、話し方(意見の伝え方)の基本を知り、それを用いてお互いの発表を聞き合うことができるようにしていきたい。身近な話題(4コマ漫画)から自分の考えを持つこと、それを書くことで整理し、友だちに分かりやすく伝えるための方法を確認し合うことによって、子どもたちが自分の考えを書くことへの抵抗をなくし、さらには意欲的に発言する姿にもつながっていくのではないかと考え、本単元を設定した。

(3) 単元の目標

- ①身近な話題に興味を持ち、自分の考えを進んで書こうとしている。(関心・意欲・態度)
- ②自分の考えを明確にし、そのわけを書くことができる。(Bイ)
- ③自分の考えを書く際に、分かりやすい言葉を工夫して使うことができる。(Bウ)
- ④自分の考えを、友だちに分かるように話すことができる。(Aイ)
- ⑤友だちの発表を聞いて、質問したり、付け足しをしたり、よかったところを見つけたりすることができる。(Bオ)

(4) 単元の評価基準

関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	言語についての知識・技能・理解
・自分の考えを持ち、書いたり発表したりしようとしている。	・自分の考えを理由と共に分かりやすく発表している。 ・友だちの考えを聞き、質問したり感想を伝えたりして、話をつなげている。	・自分の考えをはっきりさせ、そう考える理由を学習カードに書いている。	・感情感覚表現語彙を意識し、文の中に使っている。

（５） 単元展開の概要 （全１０時間）

第一次（３時間）・「つたえ合い名人」になるために、自分の考えをみんなに伝えられるよう学習することを学ぶ。発言のルール（自分の考えを持つ、理由、つなげて話す）を意識しながら、４コマ漫画を使って学習する。

第二次（４時間）・４コマ漫画の４コマ目に注目し、どんな結末になるのかを自分なりに考え、根拠をはっきりさせて発表する。

第三次（３時間）・友だちの考えを聞いて質問や付け足しをしたり、自分の感想を伝えたりしながら、話し合いを楽しむ。

（６） 授業の実際

＜主眼＞ 新聞の４コマ漫画の４コマ目を伏せた漫画を読み、最後どうなるかを予想する場面で、そうなるだろうと考えた理由を、漫画から探して学習カードに書くことを通して、自分の考えの根拠をはっきりさせて、みんなに発表することができる。

＜大まかな流れ＞

- ① 拡大した４コマ漫画を提示し、３コマ目までを全体で確認する。４コマ目は、全部を隠すのではなく、ケーキの部分とお母さんの言葉を伏せた状態で提示する。
- ② 学習カードを用いて、４コマ目に入る言葉や絵を考える。
- ③ 自分の考えを学習カードに書き、お隣さんと発表し合った後、全体で発表し合う。

＜児童の様子＞

- ・４コマ漫画が提示された時点で、たくさんのつぶやきが聞かれる。
- ・３コマ目に注目させすぎたため、２コマ目の「ちょっと～」が子どもたちの意識から離れてしまった。そのため、ケーキを全部食べてしまったと考える子が多かった。
- ・全体発表では、「ケーキは全部食べてなくなってしまった」という発表が続く中、２コマ目に注目していたＡ子が「（ケーキは）なくなるわけないよー」と発言する。「どのくらい食べたのかな」という問いかけに「分からない」と答えにくそうだったが、用意してあった色画用紙を手渡すと、『「ちょっとだけ」と自分で言っているから、全部じゃないと思う。』と大きく三角をかいて切り取った。Ａ子は、学習カードに「ケーキのほとんどを食べて、お母さんが見たらすごく減っていた。２コマ目で『ちょっと食べていい？』と言ったから、全部は食べてないと思いました」と考えを書いていく。

「つたえ合い名人になろう」学習カードの 名前（4コマ漫画）

1 つぎの4コマまんがを読んでみましょう。

2 ののちゃんは、3コマ目で手作りケーキをどんなふうにかべていますか、絵を見て考えましょう。

3 4コマ目はどうなるでしょう。そう考えた、りゅうも書きましょう。ふき出しや絵もかいてみましょう。

4 友だちの考えを聞いて、どう思いましたか？くわしく書いてみましょう。（「すごいと思った」「いいと思った」だけでは、分からないよ）

○○さんの

あやみ、	ちょっと、食べた	ちょっと切ったでいい。と
	ていよ	いていたから、ケーキを全部
		のこしてわたしたちのこ
		いばあさんのみかと思
		えました。

四 まとめ（新聞を使った4コマ漫画教材を使った実践授業を終えて）

1 新聞の4コマ漫画教材の価値とおもしろさ

（1）読み取る力、情報をつかむ力を高める（インプットする力）

4コマ漫画は単純なように見えて、実に奥が深い。たった4コマの中に起承転結があり、季節感を感じる身近な話題がいっぱい詰まっている。白黒の世界、場合によっては言葉や文も無いものもあるが、読者は登場人物の表情や動き、周りの様子から情報をつかむのである。漫画であるが故に、想像をかき立てられ、低学年から高学年、そして大人までが楽しむことができるのである。文字が読めない低学年の児童であっても読み取ることができ、情報をつかむことができるおもしろい教材なのである。何より、子どもたちが興味を持って学習に取り組む姿があった。

（2）表現する力を高める教材化をしやすい（アウトプットする力）

今年度の研究で4コマ漫画を教材化する試みをしたのは、4コマ漫画の持つ価値が本校児童の課題となっている力を高めていくのに有効であると考えたからである。発表の際に言葉が足りない、言いたいことを十分伝えることができない、同様に自分の考えを自由に書く場面においても「何を書いていいのか分からない」と悩む子が少なくない。答えなんて気にしないでいい、自由に想像したり、もっと自由に考えたり、語り合ったりすることを楽しむ子どもたちになって欲しい。

今回は4コマ目の「結」の部分や登場人物のふきだしを意図的に隠し、3コマ目までからつかんだ情報から「このあとどうなったのでしょうか？」「何と言っているのでしょうか？」などの問題について考えさせた。あえて答えは示さなかったが、子どもたちはおもしろおかしく結末を予想したり、友だちの考えを聞いて楽しんだりしていた。漫画の流れやオチによっては、想像しにくいものもあるが、低学年から高学年までの児童が十分楽しみながら取り組む事ができる教材となることが分かった。

（3）意見を交わし、関わり合う楽しさを味わうことができる

4コマ漫画教材には答えがない。そして答えが一つではないから、みんなの考えを聞き、意見を交わし、関わることで初めて楽しめる教材となる。自分の想像の世界だけでなく、友だちの考えを知り、「自分はこう考えたけれど、友だちはそう考えたのか」という視野が広がる楽しさを味わうことができるのである。

関わるためには、自ら進んで話したり、表現したりする必要がある。自分の考えたことを友だちにも聴いてもらいたいという必要感が生まれる。友だちはどのように考えたのだろうという知りたい気持ちも高まる。子どもたちは自分の考えをしっかり持ち、自ら関わろうという姿に変わってくるのである。

また、4コマ漫画教材を扱った後の児童の感想を見ると、多くの場合友だちの考えの面白さやすばらしさに触れているものが多い。また、自分の考えとの類似点や相違点に触れているものも見られる。関わり合うことで価値や考え方が変容したり、多様化したりしていくのも大きな成果と言える。

2 新聞でつなぐということ

（1）新聞と実体験をつなぐ

新聞を読んだだけではわからないことが、実体験を通すことでより身近なものとなり、学

びが深まる。言葉の意味を体得し、一歩前へ進む授業となるのだ。4年生の実践事例、6年生の実践事例ともに、それが明らかになった。記事を通して広がる世界、見方や考え方、さらに児童にとって裏付けとなる体験、具体がそこにはあったであろう。新聞は使える。教科書では味わえない学びがあることが、子どもたちの反応からも分かった。

場合によってはそこだけで終わらず、実体験から人へとつながっていく場合もある。学校を飛び出す活動へとつながることもある。地域に住む一流シェフの宮下学さんの『中沢食堂』の記事をきっかけにして、一歩前へ進む授業となった6年生の実践は、新聞で「子ども」と「人」をつなぐ授業実践ともなった。

（２）新聞でつなぐ「子ども」と「人」

学習の中で、教師以外の「人」から学ぶことはそれほど多くない。たとえ身近にいる人であっても、知っている人でなければ、出会うきっかけがないからだ。しかし、新聞を使うことで出会いのきっかけは多くなる。記事を通して、どこに住んでいる人か、その人がどんな人であるか、知ることができるからだ。

記事をきっかけに生まれた「会って話を聞いてみたい」「教えてもらいたい」という強い願いが実現した6年生の実践事例は、子どもたちの学びを深め、視野を大きく広げることになった。授業後の感想で、S児は「料理のことがよくわかったし、調理実習が楽しみになってきた。身近だからわからないけど、宮下さんのお話を聞いて中沢っていいところだなと思った」と書いていた。願って出会えた地域の方やプロの人から学ぶことは大きく、言われた言葉や褒めていただいた経験が心に残り、子どもたちの意欲へとつながっていった。また、自分たちが育つ土地の良さを再認識する機会ともなった。

（３）新聞は読むだけでなく、感じたことを「書くこと」で、自分の考えが確かなものとなる

2年生では新聞を使った授業を展開していくうちに、子どもたちの姿に変化が出てきた。今までなかなか書けなかった子どもたちが、何度も書き直しをするようになったのだ。友だちのよい表現に触れ、よいものは真似したり、自分の表現に取り入れたりしながら、自然に推敲するようになった。そのうち、用意していたスペースでは足らずに、はみ出して書くようになった。大きな変容である。結果、豊かな表現ができるようになったのだ。

「書く」ということは、自分の考えを見える形にすること。見える形でアウトプットすることにより、視覚的に再び自分にインプットできる情報となる。よい表現を付け加えたり、よりよい表現に書き直したりという再アウトプットしやすくなるのだろう。「書く」という学習は、「書くこと」に慣れるだけでなく、自然に推敲する習慣を身につけたり、表現を豊かにしたりでき、表現力を高めていくことにもつながっていくことが分かった。

五 残された課題

１ 子どもたちの実態にあった記事の提示

本年度の研究で、一番苦労したのは「子どもたちの実態にあった記事の提示」である。新聞には多くの情報が含まれているが、学習場面ではそれをできるだけ単純・明解化して提示したい。押さえたいポイントがぶれてしまうと、学びが停滞してしまう。特に低学年の児童に対しては、それが難しい。簡単すぎてもいけないし、難しすぎてもよくない。ある程度の抵抗感があり、なおかつ子どもたちが興味・関心もつ教材の選定。今後は学年や発達段階に応じて写真や新聞記事も活用した授業も行っていけるよう研究を進めていきたい。

2 書かせる視点を明確に

子どもたちのさらなる表現力を目指していくために、大切にしていきたいことの一つに「書く視点を明確にする」と言うことがあげられる。表現の方法にはいろいろある。文章を書くだけでなく、絵を描くのも表現の一つである。新聞からつかんだことをどう表現していくのか、本時のねらいに迫るために子どもたちにどんなことを書かせるとよいのか、「書く視点」をはっきりさせた授業を展開していく必要がある。